

青雲



2005.3

発行人 / (社)島根県建設業協会出雲支部青年部会

「青雲」

題 字

島根県知事 澄田信義氏



“ 風に向かって ”
~ confront the head wind ~

その昔、順風満帆なFollowの風にあおられ、この建設業界は現在の基盤や社会システム構造を確立させた。しかし今、何も考えず、ただ快晴の天空が我々を抱いてくれる時代は終り、新時代への転換期を迎えている。この雄大な風車は、いかなる風をも受けとめ大きく回り続けようとしている。また、その風を自らの力として蓄えようとしている。

我々青年部の若い力は、これからの建設業を取り巻く様々なAgainstの風に対して、この風車の如く立ち向かっていく“志”が必要ではないでしょうか。

青年部メンバーにこの志あれ!!

(社)島根県建設業協会出雲支部青年部会 広報委員会



CONTENTS

目次

巻頭言/「風に向かって」.....	①
(社)島根県建設業協会青年部会長 広戸 修	
平成16年度卒業生より一言	②
(有)佐々木組 佐々木 豊	
全国建設青年会議に参加して	③
副部会長 久文秀典	
建設業協会の特化性について	⑤
新分野研究委員長 日下雅彦	
これからの新出雲市 ~ 2市4町での市町村合併 ~	⑦
会員交流委員長 山口 弥	
建設業の新分野進出事例報告	⑧
(株)岩崎建設 岩崎哲也	
平成16年度事業レポート	
『国道まるごとクリーンアップ作戦』に参加して... (有)南場工務店 南場 操	⑨
『しまね建設技術展2004』..... (有)山崎組 山崎育男	⑩
視察研修に参加して..... (有)山原組 渡部智登志	⑪
建設産業新分野進出支援事業報告会... 今岡工業(株) 今岡幹晴	⑫
『メンタルヘルス対策講座』..... (株)フクダ 加藤昌樹	⑬
平成16年度新入会員紹介.....	⑭
(社)島根県建設業協会出雲支部青年部会組織図.....	⑮
編集後記 広報委員長/山崎章弘	⑯

「風に向かって」



(社)鳥根県建設業協会青年部会
部会長 広戸 修

出雲支部そして県の部会長を受けて早1年が経過しようとしています。あまりの大役にどうなることやらと案じておりました。案の定、大波小波の大変な1年でありました。が、部会員の皆様のご協力によりどうにかこうにか乗り越えてまいりました。改めて感謝申し上げます。

さてこの1年を振り返り、そしてこの先のことを考えると胃が痛くなる思いです。いや、想像も出来ないといったほうがいいでしょう。工事が激減する一方、管理面についての仕事量はますます増える。公共工事を請け負う業者にとっては致し方ないことではあります。

一時、新分野進出とか異業種転換という言葉がはやりました。成功した業者と、何も出来なかった業者に分かれたと思います。私も新分野、異業種について何度も研修視察や講演会に参加しました。相当な費用をかけて設備投資をし、時間と労力が必要であると痛感しました。しかし、私には資本もなければアイデアも無い、せいぜい成功だと思われる商品の取売りが関の山かな、と感じています。新分野進出とは聞こえがいいが、鳥根県という市場では採算に合わない。全国的なブランドにするにはマスコミ受けをするPRを考えなければならない。それをするにも資金が必要である。今年の全国青年会議所全国大会の折に新分野進出、異業種転換をテーマとして意見発表がありました。我々土木業者が本業を維持しながら新分野に進出するためには経営事項審査という壁があるのです。異業種を成功させるために本業を赤字にしてまで投資はできないのです。公共事業を受注するためには健全な経営内容が不可欠であるということです。

話は元に戻りますが、支部と県の部会長を受けているいろいろな方々と会うことが出来たのは大きな収穫でした。直接仕事とは結びつきませんが、個人的な利益にはつながりました(投資もしましたが)。大きな話題もあれば夜間限定の話とかその他いろいろ……。

イソップの寓話に「冬と春」があります — 冬が春をあざ笑った。お前が現れるやいなや、喜びでもう人は誰もじっとしていられない。自分は支配者や独裁者のように人々をうつむかせ、恐れおののくことを強いるのだ、と自慢する。すると春は言った。「だからこそ、人間はあなたからなら喜んで別れるのでしょう」(山本光雄訳・岩波文庫)

まさしく今は厳しい冬の時代、しかし、いつの世も春が来ない日はありません。必ず春が来ると信じ風に向かって前進していきたいと思っておりますので、これからもご支援ご協力をよろしくお願い致します。

青年部会を振り返って



(有)佐々木組 佐々木 豊

私は平成9年の青年部会設立当初より入会させていただいておりましたが、早いもので卒業を迎えることになりました。入会当初は、会社名はもとより会員の皆様方の名前もわからず戸惑いましたが、良い事に、当初は総会・研修会等がある度に名札を着けることが多く、大変助かった事が印象に残っています。

また各事業活動においては、大変だった国道まるごとクリーンアップ作戦、新技術環境の先端を走る建設技術展、自分自身の勉強になった視察研修旅行、どれをとっても印象深いものがあり、今振り返ってみるとどれも良き思い出になりました。それと同時に、青年部会の方々色々な活動を通して多くの事を学ばせていただいたこと、さらには懇親の場で培われた“横のつながり”は、今後も大きな財産になると確信しています。本当にありがとうございました。

本年をもって卒業いたしますが、今後とも変わりませず、より一層のご指導をいただきたいと思っております。

最後になりましたが、出雲支部青年部会がより一層発展する事をお祈り申し上げます。会員のみならず皆様には色々とお世話になりありがとうございました。



全国建設青年会議に参加して



(社)島根県建設業協会出雲支部青年部会
副部長 久文秀典

さる平成16年11月30日、東京で全国建設青年会議第9回全国大会が開催されました。今回の大会は、平成15年11月28日の「全国建設青年会議 第2回全国会議」で採択された宣言（「我々は地域建設産業の存在意義を広く正しく社会に発信すると共に、市民社会のニーズを的確に掴み「建設産業の市民化」を促す為共に行動する」）を踏まえ、現在あるいは近未来に最重要と思われる問題を全国から持ち寄り、問題解決に向けての研究・議論を講じたうえで、その成果を全国の会員と共有しようというものであり、全国から寄せられた41件のテーマから、事前に絞り込まれた以下3件のテーマについて、それぞれの準備委員から熱き思いをこめた意見発表がなされました。

建設産業の市民化、地域とのパートナーシップ構築とその評価について

岐路に立つ建設業経営の今後

企業評価と入札制度

全国各地の準備委員の皆さん方は今日の発表のために、膨大な時間と労力を費やされてきたと伺っていましたが、よどみない弁舌とさまざまな角度や視点から検討された内容（3件の資料を重ねると職業別電話帳3冊分以上になるそうです。）には、準備段階での労苦が大いに偲ばれ、衷心より感服いたしました。

以下3テーマの発表を究極にダイジェストすると、

平素から地域に資する活動をもって地域に認知され、「地域に不可欠な存在」として住民の皆さんとともに本当に必要な社会資本整備を考え、その実現に向かって努力する産業となりたい。（全国から87件の活動情報、内、清掃活動24件、地域イベントへの参加18件、現場見学・体験学習



第2部 広戸部会長の雄姿！（特殊暗視カメラで撮影）

8件、フォーラム・イベント開催5件 他）

苛烈さを極める再編・淘汰の時代にあって、新分野に挑戦している先行企業の現状と問題点を分析した。

（全国から52件の事例を集約）

地方公共団体が採用している入札制度では、ダンピング受注を誘発していると考えられる極めて不適切なケースが数多く見受けられるようになった。我々は、この問題を議論する視点として、品質の確保、適正な事業の推進、災害対応、維持管理等の「公共



第1部 国交省との意見交換

の利益」を第一に考えるべきだとの理念から、入札参加における企業評価にあたり、品質評価、経営評価はもとより、テーマとも関連する「地域に貢献できる企業が評価される制度」を確立していただきたいと熱望している。

というような、ダイジェストしても骨太な内容を半日を費やして大いに勉強させていただきました。ありがとうございます。大会準備委員の方々には衷心より感謝申し上げます。

後記

1. 本音を言わせていただくと、どのテーマも避けて通れぬ切実な課題でありながら、その解決法が誰にも断言できない次元にあるようで、さらに「どうしようか？」との思いが募りました……。要は「覚悟」でありましょうか？ それとも「悟り」でありましょうか？
2. 各テーマの詳細については、枚挙に暇がありませんので割愛いたしましたが、研究の成果につきましてはCD-ROMにパッケージされたものが協会にありますので、必要であればコピーを取ってください。
3. わが出雲支部が誇る島根県建設業協会青年部会の“顔” 広戸部会長も、テーマの建設産業の市民化、地域とのパートナーシップ構築とその評価について、中国地方各地の事例を紹介し、堂々と持論を展開されました。大拍手！であります。ただ惜しむらくは、会場の照明が暗く、ご本人の顔と闇とがビミョーにシンクロナイズし、ご本人がどこにいらっしゃるかわからなかったことでありました……。残念！



第2部 熱気あふれる会場



◀ デザインテーマ ▶

建設業に携わる会社がそれぞれの地域の人々や社会と良好なパートナーシップを築き、豊かな自然と共生しながら住みやすい環境作りをともに創造していく。

建設業協会の特化性について



(社)鳥根県建設業協会出雲支部青年部会
新分野研究委員長 日下雅彦

1. 建設業協会の現状について

1) 全国建設業協会

社団法人 全国建設業協会（通称：全建、National General Constructors Association of Japan）は、47都道府県に亘って約3万社の建設業者（就労者数約130万人）が、各都道府県の地域ごとにそれぞれ建設業団体を組織し、これらの地域建設業団体が全建の会員を構成しています。従って、各都道府県建設業協会が結集して構成する全国的組織が全建です。

全国建設業協会会員は、企業数27,105社（平成16年6月末調べ）で、全国の建設業者数56万社（建設業の許可業者数）の約5%にあたります。このうち法人企業は25,902社（全体の95.6%）、個人企業1,203社（同4.4%）であり、法人企業で資本金10億円以上のもの141社（同0.5%）、同5,000万円以上10億円未満が2,739社（同10.1%）、同1,000万円以上5,000万円未満が20,564社（同75.9%）、同1,000万円未満のものが2,458社（同9.1%）となっています。

全国建設業協会会員の資本金階層別、許可別企業数（平成16年6月末現在）

資本金階層	総数	個人				法人			
		大臣		知事		大臣		知事	
		一般	特定	一般	特定	一般	特定	一般	特定
総数	27,105		1	1,009	193	40	1,878	8,369	15,615
1,000万円未満	2,458					1	1	2,382	74
1,000万～5,000万円未満	20,564					32	679	5,901	13,952
5,000万～1億円未満	2,164					5	626	82	1,451
1億～10億円未満	575					1	435	4	135
10億～50億円未満	86					0	83	0	3
50億円以上	55					1	54	0	0

2) 鳥根県建設業協会

(社)鳥根県建設業協会は、前身である鳥根県建設業協会が昭和23年3月に全国建設業協会の発足に伴い設立され、現在会員数は711社です。これは県内の建設業者数約3,600社（建設業の許可業者数）に対して約20%を占め、全建傘下協会会員の比率と比べるとかなり高い水準であると言えます。

2. 建設業協会の特化性について

1) 建設業の将来展望

土木学会誌に「公共事業の削減に思う」という投稿があります。その内容の一部を紹介します。

『公共事業は事業規模50兆円（民間合わせた建設事業としては80兆円近い）で、これはGDP（国内総生産）の15%にまで上る。

建設関連業は、雇用600万人（土木技術者数20万人を含む）、建設会社数56万社で、わが国の一大産業と云える。この600万人は事業削減の嵐を前に、何を考えなければならないのだろうか。

わが国の完全失業率は、最近若干の好転があっても、いまだ史上最悪と云われる4.8%、失業者は約346万人である。概算になるが、現在600万人の雇用者の40%（事業量の減少率と同じと仮定）である240万人がさらに失業したら、590万人の失業者を国内に抱え、完全失業率は急騰してしまう。人材の他産業層への「移転」も考えられ、そこまで行かなくても失業率は7～8%近くにまで跳ね上がるだろう。かすかに見え隠れする景気好転の気配も消え去ってしまう。

こうならないために、建設業界のみならず関連の官庁、大学、コンサルといった全部門の内部改革と相互改革が必要になってくる。税金の投入という“点滴”に期待できない事態と認識すべきだ。

評論家の発言の中に、建設業界でリストラされた人員は他の情報産業が吸収し、産業全体を“活性化”すべきだという意見を聞いたことがある。一般の方には心地よい響きのある意見だ。しかし、この意見の底流には建設産業縮小の狙いがあるだけで、そこには携わる多くの人間（労働者、技術者）の生活、働き甲斐などを無視した思考だけを感じる。

「公共事業抑制論」には賛成はできないが、今の600万人体制というのが、将来をも視野に入れたとき、その一部の就業者は余剰（大変嫌な言葉ですが）と判断されれば、建設産業から他産業への移転はやむを得ないだろう。

しかし、その「移転」人員数の規模にもよるが、これは20年ほど前の国鉄民営化の比ではない社会混乱を引き起こす懸念を感じる。』

この投稿は2000年7月号に掲載されたものです。5年前にすでにこのような危機感があり、今それが少しずつ現実のものになるようとしています。

2) 建設業協会の特化性について

このような状況の中、建設業協会では、建設業の経営および技術の改善ならびに近代化、建設業に関する法制および施策の調査研究を進めるとともに、会員に対し建設業に関する内外の情報、資料および知識の収集・交換ならびに提供と、会員からの意見要望の中で業界共通の問題を把握、これを反映するため政府、国会、地方公共団体等関係方面への建議、要望を行うなど、関係諸団体と密接な連絡を保ちつつ問題の解決に努めています。

皆様の積極的な協会事業への参加が、明日の建設業界と会員各社の発展につながり、それが建設業協会の特化した部分になるのではないのでしょうか。

これからの新出雲市～2市4町での市町村合併～

新しい『ふるさと』に期待すること



(社)鳥根県建設業協会出雲支部青年部会
会員交流委員長 山口 弥

私達の新しいふるさと「新出雲市」が誕生する。

長期にわたり各地で様々な論議を重ねながら、今まさに誕生しようとしているこの新しい「ふるさと」に期待するものは大きい。

今後、合併というスケールメリットを大いに活かした地域戦略を早急に構築しなければならない。行政はもちろん、企業、そして市民の活発な動きも大いに期待される場所である。

私は、今後この地域の発展を成功へ導く為の鍵は、地域全体を包み込むイメージ作りにあると思っている。それも日本の全国民に「出雲」という地名に即座に跳ね返ってくるくらいの強烈なイメージ作りが必要だ。

それは何か？ 私は『神』と『自然』であろうと思っている。

この地域には出雲大社を筆頭に神にまつわる神話や古刹が数多く存在している。今後、今まで以上に『神』をテーマとしたハード・ソフト両面からの大胆かつ有効的な施策を昂る必要性を強く感じる。過去、旧地域でも当然努力はされてきたが、どれも散発的でインパクトとメッセージ性に欠ける物ばかりであり、期待したほどの効果は現れていない。

そして、何を今更の感もあるが、再度認識していただきたいのが『自然』である。

北部にも南部にも山があり緑に囲まれ、のどかな田園風景とその中央を威風堂々と流れる大河、そして荒々しい日本海と静かな大湖。これだけの自然の地理的財産を持った地域は全国広しと言えども、そうそう在るものではない。

また、それらから育まれる「自然の幸」も忘れてはならない魅力ある財産の一つである。

農林水産業、商工業、住民福祉、教育、社会資本整備 e t c

挙げればきりが無いほど課題は山積していることは確かだが、地域の中長期的ビジョンとそのベクトルさえ間違わなければ、これだけ潜在的可能性を秘めた「夢」多き地域であることもまた確かである。

例えば、「観光」という切り口で考えただけでも、その可能性は計り知れない。将来的に近隣の「水のまち松江市」「銀のまち大田市」「たたらのみち雲南市」などより広域的に融合することが出来れば、その効果は倍増する。更に環日本海の大きな視野に立てば、陸海空の整備次第では海外からの集客も十分可能だと考える。

これ一つを考えただけでもワクワクしてくるではないか。

最後に、最も大切なのが「ひとづくり」ではないだろうか。

この新しいふるさとに『新出雲人』として『誇り』『気概』『郷土愛』を持った市民が沢山生まれてくることを望んでやまない。

そして、我々業界の混沌からの脱出のキーワードも間違いなくその中にある。

建設業の新分野進出事例報告

「高齢者向け宅配弁当事業への参入」



(株)岩崎建設 岩崎 哲也

今回「青雲」に新分野進出の事例として原稿依頼があり、ペンならず、今、パソコンに向かっているところです。内容は、新分野進出を思い立ってから、実際に参入したところまでをお話したいと思います。

思い出して見ますと、約2年前の青年部会の飲会の席だったでしょうか。「公共工事はこれから減っていくから、何か新しいことを始めなくては…」と会員のみなどと話をしていました。「建設業は扱うお金も大きいし、利益が出たときのお金も大きいので、小さな利益を積み重ねるような仕事はピンとこないかもね」「でも、これからは、たとえばラーメン一杯を食べてくれたお客さんに、本気で“ありがとうございました”といえるような気持ちを持てるようになることが必要かもね」…こんな内容だったでしょうか。

私の本気になってやってみようと思ったのは、その頃だったと思います。何か、社会的にニーズがあるのに、うまくいっていないサービスはないだろうか？ 今後、社会に貢献できる仕事は何なのか？ いろいろな選択肢がある中で、私は「福祉」というキーワードに目を向けることにしました。

鳥根県は全国でも高齢者率が高いので、高齢者への福祉サービスの充実は今後、重要なテーマであろうと考えました。現在、市町村でもサービスの充実に向けて努力されておりますが、財政難の影響もあり、十分な支援は行われていないというのが現状ではないでしょうか。市町村が行っている配食サービスも対象者全員に行き渡るまでには、まだ至っていないというのが現状であると認識しました。こうした状況の中、私は高齢者の皆さんにとって重要であろう「食事」というニーズに答えられないかと考えました。

社内で検討を重ねた結果、全国でFC(フランチャイズ)展開されている「高齢者専門宅配弁当 宅配クック123」と平成16年6月にFC契約を交わし、8月に出雲店をオープンするに至りました。オープンしてまだ約半年ですが、「高



齢者専門宅配弁当」を休日・祝日を問わず、弁当1個からでも配達し、おいしく安全な食事を高齢者の皆さんに提供していこうと頑張っているところです。大きな利益は望めませんが、微力ながら、地域社会の福祉サービスに貢献すべく、努力していこうと思っています。

以上、実際に参入した、これまでの経過をお話させていただきました。

最後に、他社の皆さんが立派な新分野参入事業をされているにも関わらず、自社の事例を紹介する場をいただけたことに感謝申し上げます。ありがとうございました。





『国道まるごとクリーンアップ作戦』 に参加して

(有)南場工務店 南場 操

今年度より“全国建設青年の日”に制定された2004年7月28日、県下11支部の建設業協会青年部会員で一斉に国道及び主要な県道等のクリーンアップ作戦が実施された。連日の猛暑の中9:00より出陣式が行われ、「道の駅湯の川」に松江支部・出雲支部の会員約100名が集まった。

出陣式終了後、各班それぞれ持場へと別れ清掃活動が始まった。駐車場で車から降りると額からはすでに汗がにじむほどの暑さだった。

清掃は、私の担当である神戸橋（高松町）から知井宮町交差点までの区間を3人で一往復したが、数年前から見ると空き缶の量はかなり少なくなってきたように感じた。逆に、国道沿いを歩いてみて、タバコの吸い殻の多さにおどろいた。今回歩いた区間は特に歩行者が多いようには思えないが、車からの投げ捨てなのかと3人で話しながら、吸い殻を拾った。タバコを吸わない私には、車に灰皿があるのにナゼ？と思わずにはいられなかった。また、ゴミの中で金属屑（鉄板屑等）が多かったのにも驚いた。

滅多に歩く事のない国道沿いの歩道を掃除しながら歩き、車で走る時とは違った景色を年に一度見ることができるのもまた、この活動に参加出来たからだと思う。

それにしても、今回で5回目になるクリーンアップ作戦、今までで一番暑い日であった。



『しまね建設技術展2004』

(有)山崎組 山崎 育男

12月17日・18日の両日、出雲ドームに於いて国土交通省、島根県、出雲市等の主催により「しまね建設技術展2004」が“防災そして景観・環境”“安全に暮らせる美しいまちづくりをめざして”をテーマに開催されました。

各企業及び団体がコーナーに分かれて出展の中、(社)島根県建設業協会は『ちっちゃな達人大集合！～ようこそ、けんせつワールドへ～』と題して、出雲支部青年部会がその任務を担って参加しました。

今回は前回同様「バックホウによる餡取り」「建設機械展示」に、新たに流行の「ストラックアウト」「電子ダーツ」を加え、それぞれ委員会単位で役割分担し運営を行いました。18日にはラジオ番組“どど～んと土曜日新・鮮・組”の生中継や“デカレンジャーショー”が催され多くの人にぎわう中、我々出雲支部青年部会は今回で担当するのが3回目ということもあり、みな手慣れた様子で役割をこなしているように見受けました。

私も初回からこの行事に参加させていただいておりますが、我々の展示コーナーが子供向けということもあり、毎回毎回みんなの表情が、普段の厳しい形相から多くの親子・子供達と接しているうちに澄んだ目の満面の笑みを浮かべた柔和な顔つきに変化していく姿がうかがえ、とてもほのぼのとした和やかな時間が流れていると感じます。

子供が純粋に建設機械に興味を持ち嬉しそうに一緒に写真を撮る親子、子供より親の方がのぼせてバックホウで餡を取っている姿など、様々な親子のようすを見ながら、私は“この子供達が我々の年代になるとき我が出雲地域また建設業はどういう形で存在しているのだろうか”といつも思います。幼いころは車や建設機械などに興味を持ち、親御さんにおもちゃなどを買ってもらい「大人になったら建設機械の運転手になる！」と言っていた子供達が、成人に近づくとう工事現場をみて「うるさい」「汚い」と言ったりします。いま我々建設業関係者は、今回のテーマでもある景観・環境・安全に十分に配慮また考慮して施工し、いろいろな規制のなかより良いものを後世に残そうと日々奮闘しているところではありますが、この子供達に如何にして建設業の素晴らしさを語り伝えられるのでしょうか。

より良いものを残すというのはもちろんですが、子供達の純粋な建設機械などへの憧れ、また夢を抱いていた気持ちを忘れさせないためにどうすべきか、これから青年部会で取り組んでいきたいし、私自身の課題にもしようと思った2日間でありました。

皆さん、大人になり“夢”という言葉をお忘れいませんか？ どんなちいさな“夢”でもかまいません。毎日“夢”を持ち続けお互い頑張りましょう・・・！



オジサンたちの優しい笑顔!



視察研修に参加して

(有)山原組 渡部 智登志

昨年の11月29日から30日にかけて、会員交流委員会の主要な事業である「東京視察研修」に参加しました。

11月29日朝、青年部会員18名は出雲空港より東京へ向かいました。羽田に着くとすぐに、今回の視察研修の目的である「最近の国政状況」についての勉強会並びに参議院議員 脇 雅史氏に「公共工事の品質確保の促進に関する法律案」についてご講演を賜りました。

以下、脇議員より伺ったお話を私なりに要約すると、
 目的： 公共工事の品質確保に国の責務を明確にし、かつ基本的事項を定める。
 現在： 企業の技術力を審査 **価格競争** (技術的工夫の余地無し) 品質？
 将来： 企業の技術力と技術提案を審査 **総合評価** 品質 個々の技術力評価に反映

コスト重視で品質は二の次という現在の資格審査業務を、今後は品質重視、不適合業者の排除、国民の真の利益の確保を目指し、平成17年4月の施行を目指しておられます。我々青年部会も是非、このような政策をバックアップしていかなければと強く感じました。

今回の勉強会及び講演を聞き、やはり今後は小泉内閣の三位一体改革により、島根県のような地方は冬の時代なのだと思改めて実感しました。その中で我々は国に訴えていくリーダーを選出しないといけない、それが我々に出来る手段の一つだと感じる視察研修でした。



建設産業新分野進出支援事業報告会について 今がビジネスチャンス！



今岡工業(株) 今岡 幹晴

建設業界の新分野進出や異業種への参入の必要性が問われるようになってから、かれこれ数年が経とうとしている。これまでの右肩上がりの建設業界は、今や国をはじめ各地方公共団体の緊縮財政による公共工事の大幅削減により、全く先の見えない、又かつてない状況が続いている。このような状況のなか、去る1月26日に島根県建設業協会出雲支部青年部会において「建設産業新分野進出支援事業報告会」が出雲健康福祉センターにて行われた。

経営研究・新分野研究合同委員会からの報告内容は、富山県の梅本建設工業(株)への視察報告で、この業者が火力発電所の残材石膏を利用して砂と混ぜ合わせた製品を開発し、販売に成功したというものであった。この製品は『カルカル王』といい、モルタルのようなもので、中央分離帯や歩道の植樹帯の雑草が生えやすい土の表面にこの製品を敷き均し、水を散水し、約30分程で硬化させ、防草につなげるということである。施工も容易で、国土交通省、県、民間工場などで施工の実績をあげているとのことだった。

この業者が、新分野事業に進出した背景としては、土木工事主体であったので、将来の公共事業の激減に備え、提案型の営業を展開しようと考えた。全国ピオトープ協会の会員であり、今後、自然環境型の製品が求められると確信した。
 ・自社のアスコン、生コン、土石プラントの残材を有効利用したいと考えた。
 以上のような理由で新分野に進出し、平成6年の開発開始から、平成12年に『カルカル王』が完成するまで、約6年の歳月を要している。

やはり、他社のマネでなく製品を自社開発するには、それなりの時間とコストが必要なのだと思感じた。さらに、社長をはじめとする役職員の信念と情熱があってこそ、実用化につながったのではないだろうか。

ある方が、「現在の状況は、明治維新後、太平洋戦争の敗戦後と同じ位の激変の時代だ。」とおっしゃっていた。それぐらいに、今までの価値感はずいぶん変わり、今まで常識だったことが全て覆されることも、よくあることになってきた。

私は、厳しい状況は続いているが、建設産業は決して無くなることはない産業であると信じている。今まで建設産業が地域経済の発展に果たしてきた重要な役割は、変わることはないと思っている。ただ、今は『旧時代から、新時代の建設産業』に変革をしようとしている時期なのである。また一方で、今日まで多くの諸先輩方が熱き情熱をもって築き上げられた建設産業に敬意を表し、学ぶことも必要だと思う。

この厳しい時代は、逆に考えれば、チャンスの時代である。固定観念にとらわれずに、常に周りから、成功事例等の情報を収集してチャレンジする。そして、とにかく元気を出して“ダメモト”でもやってみることに、常に前向きに取り組んでいくことが一番重要ではないだろうか。自分自身、そういう気持ちを持ち続けていきたいと思う。



『メンタルヘルス対策講座』

「メンタルヘルスケア」について思う



(株)フクダ 加藤昌樹

今日の社会は、経済・産業構造の変化により、日々複雑化・多様化してきております。特に我々建設業界を取り巻く環境は公共事業の大幅削減、激化する受注競争等今後さらに厳しくなってくると考えられ、仕事上のプレッシャー、多忙、経済的不安などによるストレスを感じる勤労者の割合も増加してくると思われまます。

去る1月26日、島根県出雲健康福祉センター主催、島根県建設業協会出雲支部青年部会共催による『働きざかりの健康づくり研修会』が実施され、斯界でご高名なエスポアール出雲クリニック院長 高橋幸男先生に『事業所におけるメンタルヘルスケアの必要性』についてご講演をいただきました。

仕事や職業生活に関して強いストレスを感じている勤労者の割合は年々増加しており、統計によると2002年には約62%（1982年 52%）にのぼっているとのこと。多かれ少なかれ誰でもストレスをもっていることは明らかですが、小さなストレスも積み重なると気づいたときには、胃潰瘍などの身体の病気やアルコール依存などの行動障害、そしてうつ病などの心の病気になったりするので。「まさか、このオレが・・・」と思っている人がうつ病にかかることも少なくないとか。今後、就業意識の変化や働き方の多様化の中で勤労者の心の健康問題はさらに増大すると予想されます。

以前実施された、我々出雲支部青年部会員を対象にしたアンケートでも「周囲にストレスから体調をくずした人がいるか？」の問いに対し、約半数の会員が「いる」と答えており、その中でも中間管理職のストレスが大きく、仕事上の問題が直接的原因となったものがほとんどでありました。こういう結果を見ると、目にみえないものでも私たちの生活にはストレスが満ちており、程度の差こそあれ確実に働き盛りの身体と心に影響を与えているのだと感じました。

今後、建設業における経営環境はさらに厳しくなってくることは明らかです。そういった厳しい時代に備えて企業としては、人員削減・給与ベースの低減化等、企業淘汰の時代に生き残るために様々な手段を用いなければならなくなるでしょう。しかし、他方では社員に対する十分なフォローアップ、つまり事業所における『心の健康づくり対策』の推進も一層強く求められてくると思えます。また、行政に対してもその実現のための支援を要望すべきであると思えます。

心の病気については、今までなかなか他人には理解されにくい問題であり、「触れたくない。触れられたくない。」問題でありました。しかし、このメンタルヘルスケアに取り組むことは勤労者の健康保持増進対策の一環として、また企業の生産性向上および安全確保上のリスクマネジメントとして非常に意義があるものではないでしょうか。

『メンタルヘルス対策講座』開催趣旨

ますます激化する受注競争、下がり続ける請負金額等、我々経営者は迫りくる企業淘汰の嵐に向き合いながらも、最後の最後まで“がんばり”続けていかなければならない宿命にある。

けれど、この“がんばり”から発生する副作用こそが、近年企業にとって「大なるリスク」としてクローズアップされてきた。すなわち、2000年6月に差戻しの東京高裁で和解した過労自殺をめぐるいわゆる「電通裁判」以来、労災の問題や安全配慮義務の問題は社会的に厳しく問われるようになり、その後の訴訟のほとんどで企業側が敗訴し、多額の賠償金や和解金を支払う結果に至っているからである。

もはや「病気になったのはその人の責任だ」とか「自分の健康は自分で管理しろ」などという悠長なこととは言っていられない。一生のうち女性の4人に1人、男性の7人に1人はうつ病になるといわれ、自殺者の数が交通事故による死亡者の4倍にのぼる現状を踏まえてみても、事態は深刻である。それが、さらにこれから負荷を掛けなければならぬとあっては気も重くなりがちである。けれどあえてこのメンタルヘルスに取り組むことで現状を認識し、情報を公開することで世論を喚起し、あわせて種々の方策を取り入れていくことでリスクはある程度まで軽減できるのではないだろうか。我々は、我々が守っていかなければならぬ全ての社員と企業、業界のためにこの取り組みを企画・実行するものである。

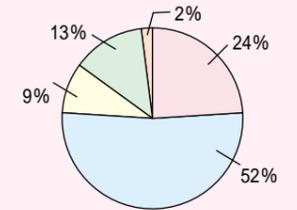
最高裁が長時間労働と自殺の因果関係、会社側の安全配慮義務を明らかにした上で、会社側の非を認定する判断を示し、会社側は1億6千万円余の和解金を支払った事例

企業におけるメンタルヘルスに係わるアンケート調査(抜粋)

当資料は出雲支部青年部会を対象に実施した調査結果の一部を抜粋して記載いたしております。

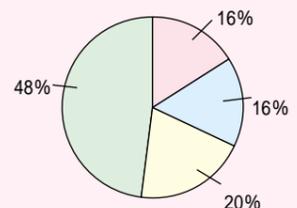
- あなたは会社においてどんな立場ですか？
社長 経営陣（役員・後継者を含む）
中間管理職（部課長級） 実務管理職（係長級）
一般社員

番号	数	割合
1	11	24%
2	23	52%
3	4	9%
4	6	13%
5	1	2%
合計	45	



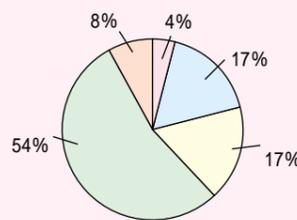
- 現在、あなたの会社あるいは同業他社の社員のなかでストレスから体調を崩された方がいらっしゃいますか？
社内にいる 他社にいる 社内にも他社にもいない

番号	数	割合
1	7	16%
2	7	16%
3	9	20%
4	22	48%
合計	45	



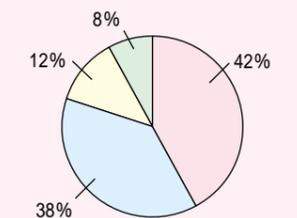
- その方の職種は何ですか？（前項で複数の該当者がある場合は、最も顕著な人を選んでください）
総務 営業 工務の責任者（部長級）
現場管理者 作業員

番号	数	割合
1	1	4%
2	4	17%
3	4	17%
4	13	54%
5	2	8%
合計	24	



- 精神的ストレスの直接的原因となったものは何だと考えられますか？
本人の職責あるいは社内における問題
職務に係わる外部との問題 家庭の問題
その他

番号	数	割合
1	11	42%
2	10	38%
3	3	12%
4	2	8%
合計	26	



平成16年度新入会員紹介

平成16年度は2名の方に入会いただきましたので、ご紹介いたします。



岡田好美 S37.3.8生
(有)別所組(出雲市)係長

現場が好きで他の業種から転職し、別所組に入社しました。経験もなく現場作業員として仕事を覚えましたが、重機などの運転に関し才能がないことが解り、方針を管理に変更し勉強しました。幸い資格も順調に取得し、現場代理人、監理技術者を経験しパソコンも人並みに使えるようになったら、営業兼ISO担当になってしまいました。現在は、総務(主に経理)担当になりましたので、ますます現場に出ることがなくなりました。

皆様の会社から「岡田好美」を名指しで下請けの話などいただけませんかでしょうか。
(多少、偏屈なところはありますが、よい仕事はします。)
今後ともよろしくお願ひします。



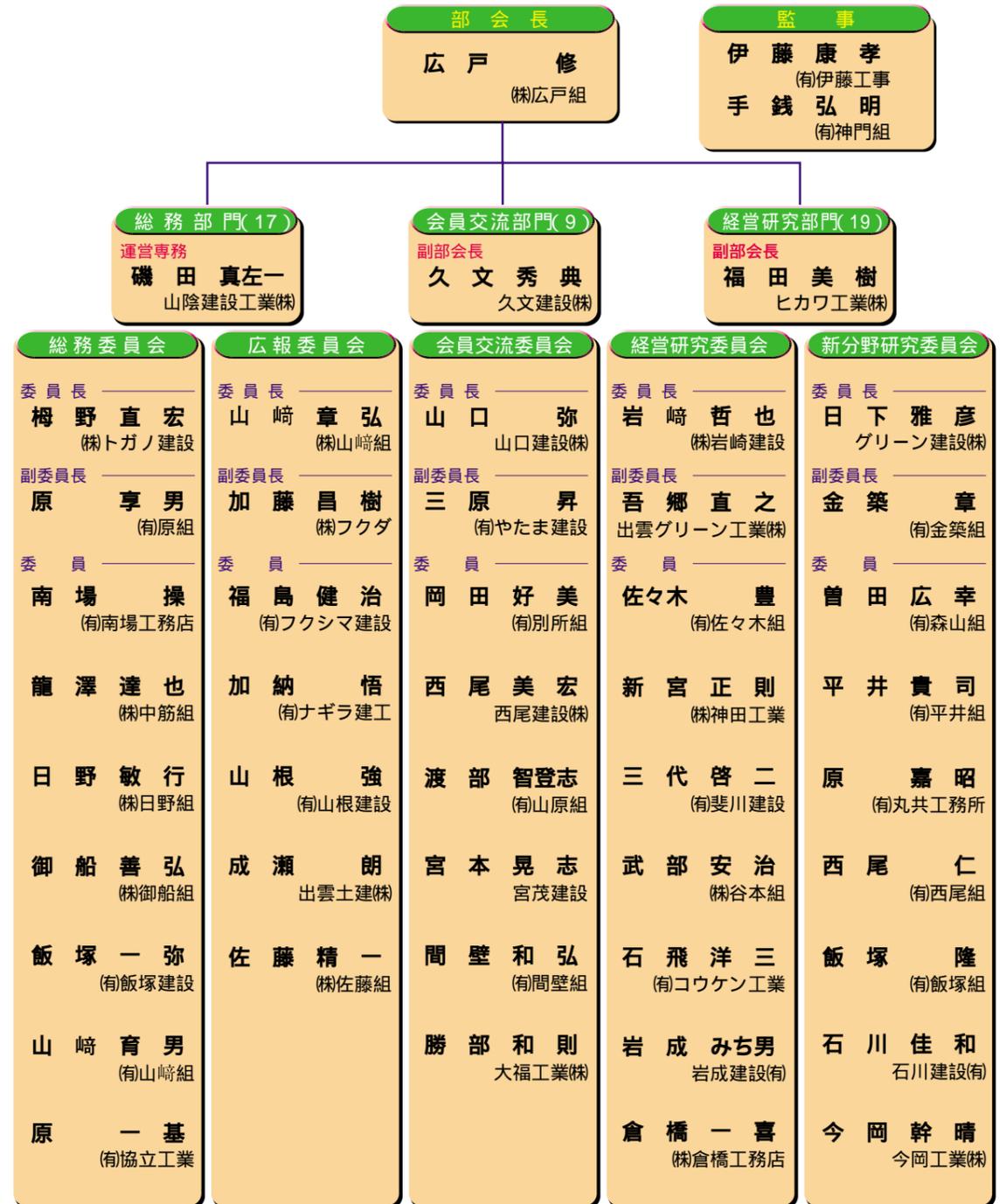
三代啓二 S37.1.3生
(有)斐川建設(斐川町)主任

昭和55年に高校を卒業し、関西で3年ほど他業種で勤務していましたが、地元へUターンして早20年あまり経ちました。今年度から正式に(?)青年部会に入会しました。厄年の42歳を過ぎてからの入会で、少々、年を取った新入部会員ですが、皆さんの足を引っ張らないようにがんばりたいと思いますのでよろしくお願ひします。

現在は、町内で、真空システムの下水道工事の担当をしています。とはいっても我が社は人材不足のため、私は重機のオペ、ダンプの運転手、測量、管理すべてやっています。どなたか知り合いの方で、土木の管理を試してみたいという方が居られましたらご紹介ください。

いつまで青年でいられるかわかりませんが、これからもよろしくお願ひします。

平成16年度 (社)島根県建設業協会出雲支部青年部会 組織図





編集後記

いよいよ行政の施策である公共事業費の削減が本格化してきた。思いのほか削減率が予定のペースよりも早いようだが、間違いなく、これが今の現実の姿であることは、あらためて再認識をしなければならない。

しかし、公共事業は、この世の中にとって必要なものであり、建設業者もそれぞれの地域になくてはならないものである。このことは、どんな時代になろうとも不変であると思う。昨今では、建設業者の「自立」ということが大きく取り上げられるようになり、我々も自助努力を続けているところである。

何をもって「自立」というのか難しいところではあるが、利益をもって「自立」というのであれば、今の社会システム、行政スタイルを大きく変えない限り、建設業者の「自立」はありえないと思う。もし「自立」ができるとすれば、行政に頼らず、民間の力だけで全くの異業種的な事業が成り立つ場合だけではないかと思う。

少なくとも、すべての建設業者は、今の財政難の状況を十分踏まえて、形にはなっていないかもしれないが、がんばって努力をしている。しかしながら、我々は民間企業として生き抜いていかなければいけないし、建設関連業種に従事している多くの労働者の雇用も確保していかなければならないのは事実である。

昔ながらの建設業者的な思想で「自立」を考えていくには、既に限界がきている様と思う。これから「自立」していくには、その会社を経営する人の人間性、信頼性、特異性等が評価されていくのではないかと思う。先進的な考え方の基で、志を同じくする意欲のある人間が力を併せていく事が必要であり、それが自らの「自立」への手掛かりになるのではないかと思う。その志が、この建設業協会という組織の特性であり、魅力とする部分ではないだろうか。

平成の大合併により、出雲市・平田市・大社町・湖陵町・佐田町・多伎町のそれぞれの自治体は消滅し、平成17年3月22日、2市4町で新しい「出雲市」が誕生する。大きく時代が、地域が変貌しようとする一瞬である。新しい希望が芽生えるこのときに、我々青年部会も熱い Power と気概をもって、自らの人間形成を行い、存在価値を高めていかなければならないと思う。がんばりましょう。

最後になりますが、今回ご寄稿いただきましたメンバーの皆様のご協力に感謝を申し上げ、また本年を最後にご卒業なさいます皆様の長年の御労苦に対し表敬致します。

広報委員長 山崎章弘